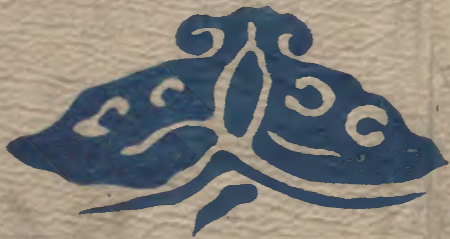


高月屋



和書門			
類	號	函	架
類	二〇〇	一	一
冊	一〇〇	二	一



内閣文庫			
類	號	冊	函
類	二〇〇	一〇〇	一
冊	二〇〇	一〇〇	一

(三七和)

内閣文庫			
番號	和	28420	
冊數	100 (73)		
函號	211	300	

七十三



A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale



Kodak, 2007 TM: Kodak





明治十二年
東京



塩尻卷之七十三 其保

手辨改元の式戦國

京所時代の称取

六諭何義板行

白綾邑の故事 聖天岩崖

汗體と別の玉石金朱

孔子三戒三畏

辛丑傳説古跡九百回忌

丹州と其格立の因

浪原と神お祭の因

あまふくしと魚の因



三村六位の袍三

大師海の巻

吉野皇裔二宮旧跡

古坂九昌院の上月記

史魚尸凍

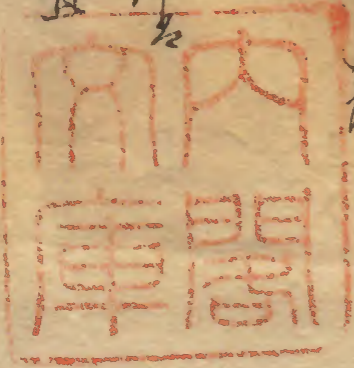
人混よと持多辨名

我國漏刻を直

位抄松孝依地巻の像

勢州菟野山湧本の因并記

徐神翁の直言



一行阿闍梨の言

神道の形儀

張弘靖の言

世人毎に饑饉を於ふ

程子の言

- 年号改元の式 戦国擾乱の時古来の名を記さず古法陸奥一 元和の法を異朝の手号をとりて用ひ勅文を以て其法沙汰も亦も一山也寛永以来先朝を考へてその法事少く回子後日一も太平の寸草也 天和改元の時各地の學者も是より其法事少く回子後日一も太平の寸草也
- 今時六位の袍を纏ひて緑を以て四位の濃紺も亦くや紫色^{三位以上} 絶く橡染りたりて四位の濃紺も亦く大に成作る緑濃今も亦く七位の袍を六位の袍より作る浅の分も亦く又侍の官位を以て衣袍を以て其法事少く回子後日一も太平の寸草也
- 京の所月代より一称の東山殿 後改 の時京極大徳寺

持清作本 佐和の月山補せし京師の事を奉行せし

其此江州より一府多岐を後当中原高忠を以て

京師を置し弟を幸せしを所自代り候し是

始ありしに所自代り候し是

○或人云我佐十一月天台右沙海の子契を喚し云

今日より一歳を添し是何の謂と予云是冬玉の遊を

あやうし傳く大師忌の侍齋を混し刺し賀稱は

梅才りに宋の陸放翁の冬至の一聯を添ふりし

轉る解身の老しは怯弱の年は郷俗謂典冬至

飯取添一歳を之を以て初冬也

○去年甲東の命を依り清帝の六前衍義官板成に

天下は普く世を治りしは無学の徒は治りし

魚がまを奪て室直清新助 作を著し彼書の大意

を和字を多し様を賜て世の志を治りしは

中法実と學校の政ありしは世より只号合を以て

天下を主維りしは清帝の六前衍義官板成に

綴り此民を以て治りしは世より只号合を以て

おほけを以て治りしは世より只号合を以て

凡そ有縁く是れ侍也

○和州吉野山のありしは今市の継り東山六七里計り

婿の峯の標は河合或は河野 長祿元年の冬核死

より一書を二宮の君の旧跡ありしは

漆園を令るのり、美しき事々々、名利を厭捨して
山林より著し世法を凡るの汚泥の如く、俗より身
の業を倉けり、之を凡るの倉穀の捨は是作り、必
愚賢不肖の毎より其を分珍々々、

○ 享保六年辛丑六月四日、傳教大伴九百回の冥忌、
比叡山法云、台宗の傍國、我が國圓戒の始
祖志まは法宗共々崇公傳ふ、予も教謝の為、親世を奉
經を淡懺法を修し、香をけり、作りし

大鵬搏風冥海吼 怒声震起走龍蛇

涼雲浩出四明月 沛雨長開五嶽花

○ 或問我國の山、一官漏刻を直鼓を亦て十二時

を考ふ不知何甚の代より、候鐘を撞く時を記す

事あり、予曰百鍊抄曰大治二年二月の條陰陽寮漏刻城之

多、此鐘は桓武帝遷都の時作り、後、三十三

七年を歴、二名が國上久より、時子鐘あり、心

但其始を知らず、桓武帝の時より

○ 或人描きし、丹抄天橋立の園、左に懸、陸奥松

急出村の象深と合せ、二橋系云り、山も川の、經系の橋地

少、伊勢の二見、目もあやう、んを公は任を好、り、心、り

せり、心もまた、んを公は任を好、り、心、り

か、心を記し、り、心、り

い、心を記し、り、心、り

○信州松本領某の里小地蔵堂あり一十年昔は
 像失せしと其名を傳へしと云ふに云ふに小尊佛三
 尊七月十五日地蔵大士の像いつくともなく現れし
 壇上より像をもちて水野出相寺に奉安す三縁
 山の老僧こゝに世ほき川の化現山人と云ふは昔を
 感せしと云ふ七月十五日前大徳正の法坊祐天あり
 そく西遷しありし頃主持小奇吳の里にあり
 大徳正の州人祐法上人、爰の法坊を奉安す其真像
 を自招請して彼に奉安すしと云ふ
 因に九月朔日彼地蔵堂の方丈、水野より祐
 法上人に状を奉報をせしと云ふ事、遂に此像の真像は

惠公の作と云く

彼大徳正の法坊を、在世の高徳其名天下に普くして
 在世の奇特と云ふ最後の瑞雲と云ふ人、其見同法
 堂の法計しありし、於此傳へたりし、其遺徳は武州
 日暮の地を領りし、奉安を遂き、明影山祐天寺善久
 院と云ふに、庚子七月、大徳正才三回の忌辰、山々十
 五年、其寺通門人、以下奉安して、一石の三祀妙曲を、後
 誦し、報恩追をの佛事、いづくに修せしむ哉

寺の古き、形、大徳正の真影、遺徳の舍利を、奉安す
 予も、尔を、經歴の地を、むす、はく、若、後、跡を、とて、撰、く
 銘、を、一、致

むすひきく神意のささるる未繁も

ゆるゆるやまきと秘の日影の計

祐公廉存の日十万人のしを佛ををけしををまひし
上の玉友のま屋下にあやしの管座する人其を座入
日課の称名を唱へて勢州松坂から清光寺を其
存所と定めて一年山中して人の救も多し今年
辛丑正月多勢海にさく九四十一万七千二百二十
三人あり

○ 予 東都にて法唐三神の画像を好く東山岩栖
村菴の自益齋也 師諱ハ良彦字ハ希世
惠鑑明照禪師ト溢ス 有以し律に三月
廿五日を捨擧す

唐のるもをくぬ社も山をいり

あつくに高き梅が花の影

○ 海内奇観といふ書に唐生傳授佛地を記する書也
夫山川の奇景は造化の妙なるを交り又王侯といへ
るも恣にたふすの難しき事なり自勝小書にて
をたふすにたふすもあつてはまはるる也國に名
匠奇観の法は川中里小舟の舟下之事也
亦一旦凡のうんを流く思ひ人々も新入に
中れたらにや佛地の系物をたふす其時志
をを應り目をするもたふすのふあつては米道歴
事小書に其見し所々の有様を思ひ出さる今も

目前より見る所は、一と一と之は、一と一と、
忘き、一と一と、一と一と、一と一と、
を、一と一と、一と一と、一と一と、
一と一と、一と一と、一と一と、
新ちる、一と一と、一と一と、
川の一と一と、一と一と、
雷田子の浪も、一と一と、
の花ほ、一と一と、一と一と、
秋風吹初、一と一と、
おぼえ、一と一と、
勢州、一と一と、

あ、一と一と、一と一と、
見、一と一と、一と一と、
のは、一と一と、
山、一と一と、
後の七月七日、
彦星の、
ま、一と一と、

湯本之圖
在りて

山 巖

産 所 岳

善 薩 岩

池 子

つ 谷

白 滝

洗 除 塵 土 岩 の
法 淨 地 方

いそがしかなん
目をよめるか
溪の老身を
あ

小 月 霽 高 照 寒 溪 閑 鏡 函
水 光 長 欲 灑 驚 浪 逆 烟 岳

南

湯 本 図

此 東 小
野 裏 湯 之
温 泉

羅 漢 石

三 本 杉

燒 筍 山

雨 晴 奇 白 雲 隈
病 骨 忽 清 晚 眼 閑
龍 水 温 々 非 待 鼎
遊 人 幸 得 上 春 臺

茶 師 堂

此 東 小
野 裏 湯 之
温 泉

泉 温

札 制

此 湯 之
表 湯

湯守山 南



此処
居士
名
親州
巖

礫河風煙白
洞傾洞急流
夕陽千里霽
東海入吟時

石上の松をこきり山の上にも見侍り
たれあふり詠め侍るもふたり

冬ふりに名はかき
あふり
あふり
あふり

茶師

冠嶽



一里山を分て麓より登り此方より敷才所
三國に足ぬき姿奇なり湯布谷
絶頂より下りてまき原あり此巖山は良嶽
長等山石小なりともさるがよ見ゆ
琵琶湖目下まされりそさるるあき
さるるあふりりるまきれり此花
いしくまきれり

地獄
谷

中流に流るる水は
あふりりる
あふりりる
あふりりる

西

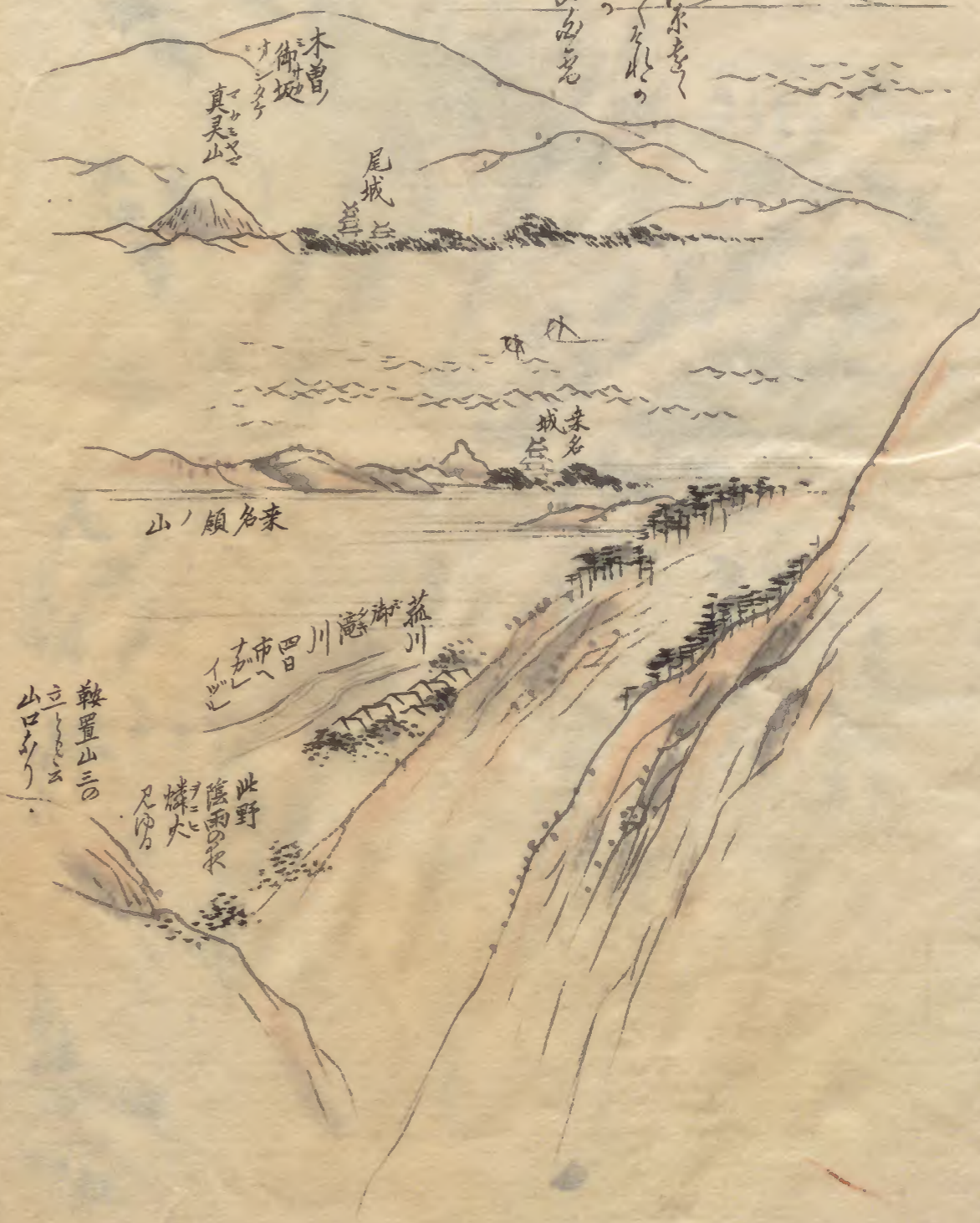
菴峰佳景一河長
万籟割愁薜萝涼
忘了白頭情鏡恨
猶隨石樹老誰妨
玉屏卷翠晴當戶
碧水潺湲任繞牆
滿月描福室眼界
穩餘閑事睡空堂



東

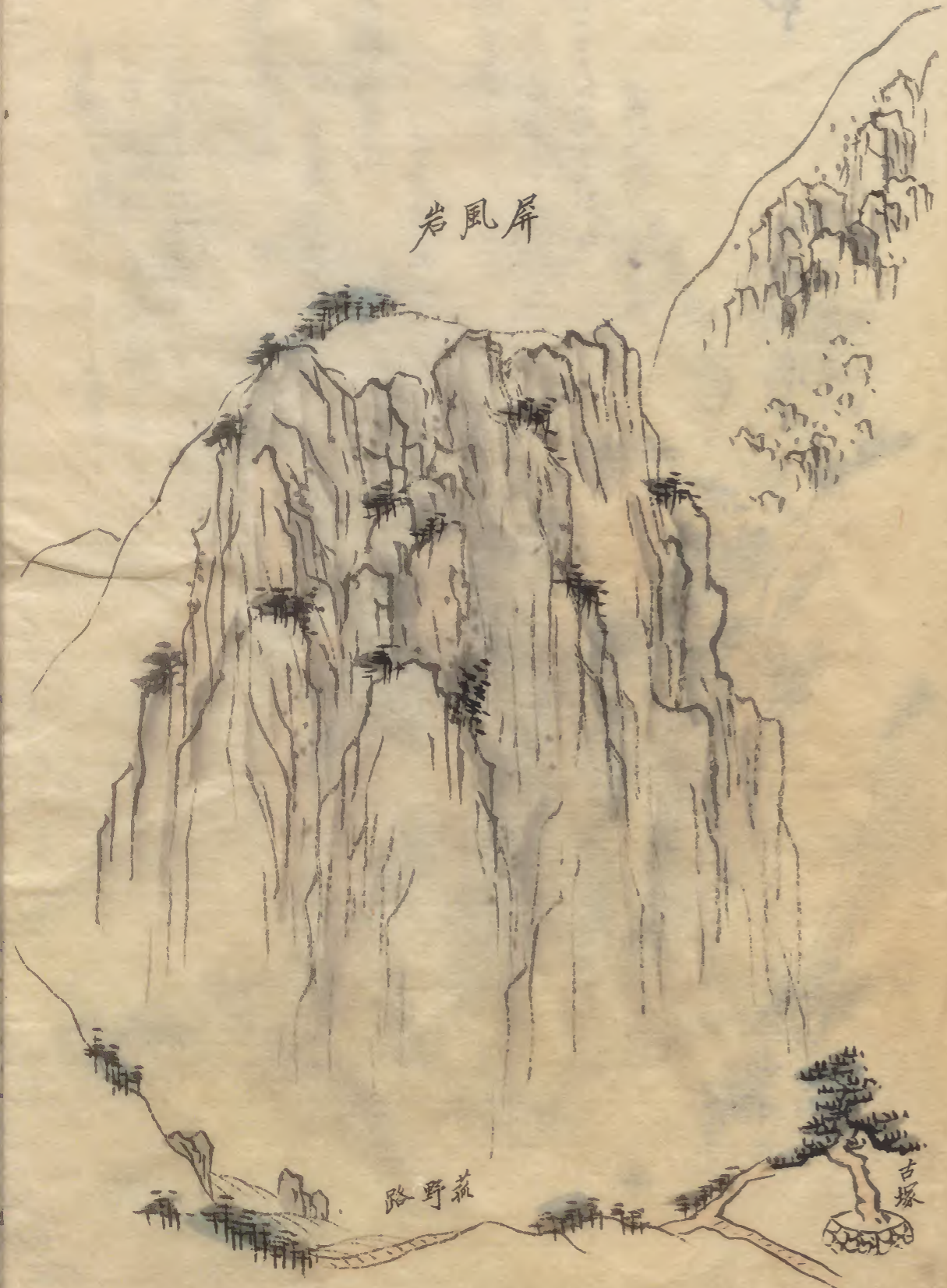
夕日初染海未老
芳名水々々々々
あゝあゝ
本一の西名

富士



東

岩風屏



元湯より一形なるの
 月一湯宮二面を
 水二面作る温泉の
 今も大已貴命の神
 かりのゆをせむ
 なる

汲くふ

神女みくを

三編川の

後きふうれを

わも

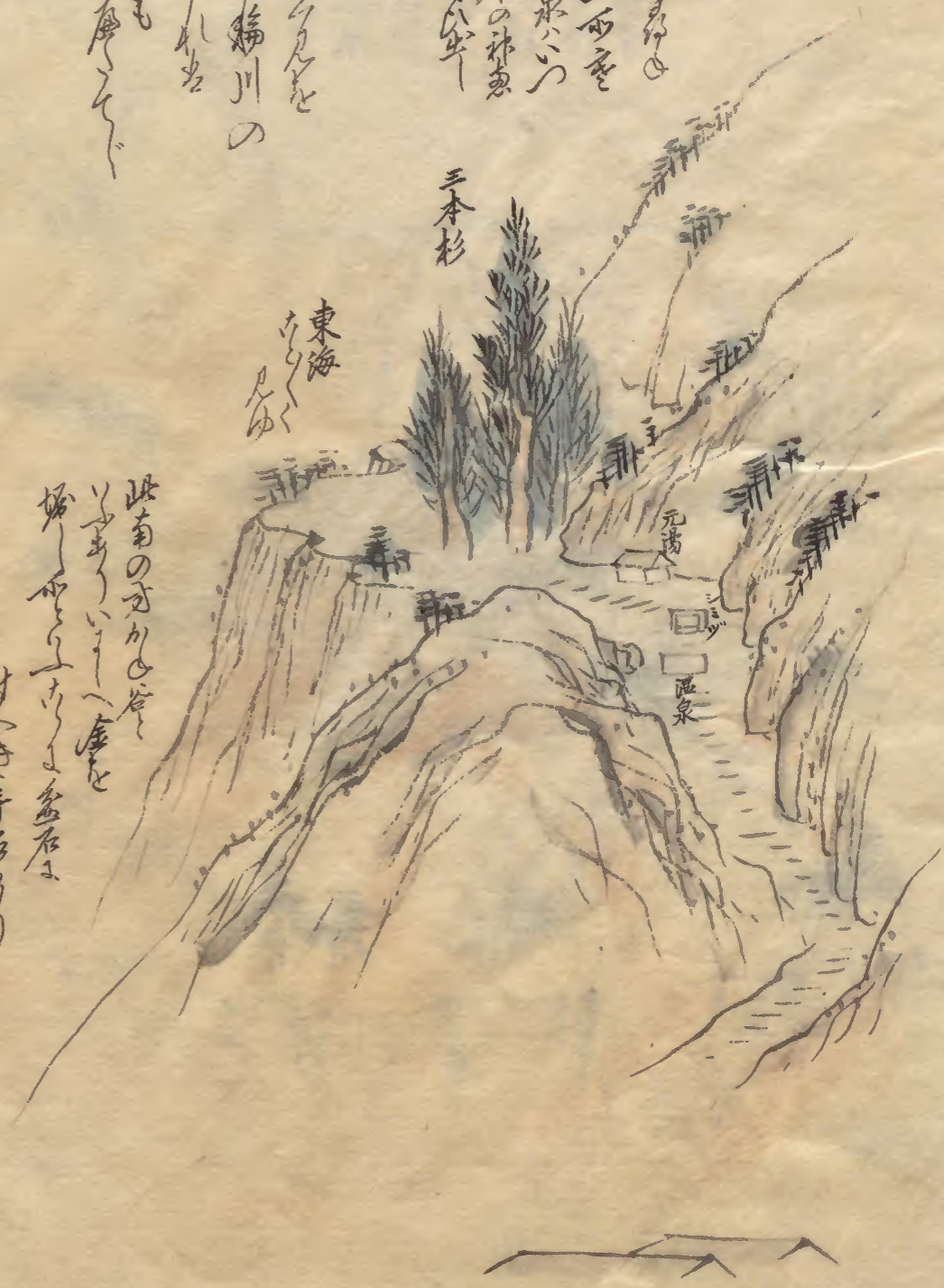
庵とぞ

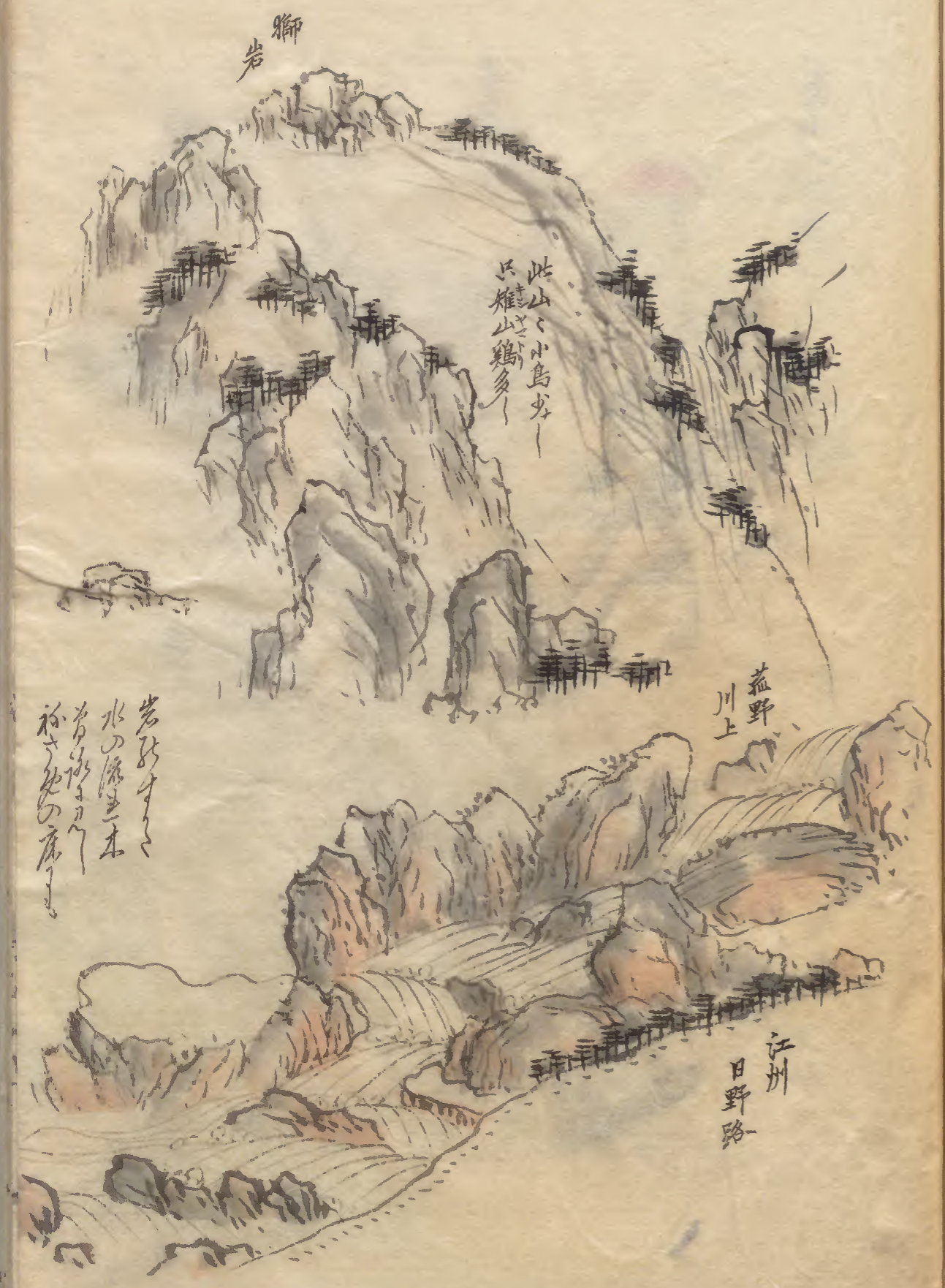
三本杉

東海

のり

此南の方の
 山ありて
 坂ありて
 水ありて
 古塚あり





獅岩

此山は小島あり
只雄山鶏多し

菘野川上

江州
日野路

岩はすく
水の流る本
谷の底に
石の底に



水

此奥は御滝
奇異の志水
あり

山はくわくくわくの
そともあるくわく
のこころのわき
滝はくわく

菩提山

青滝

此岩
見し

不動堂

一洗塵埃眼

白寿白浪奇

玉龍高落峽

山月碎流漸

昔滝見よすくくわくくわく
少むよあすくくわくくわく
るるもあすくくわくくわく
ありあり



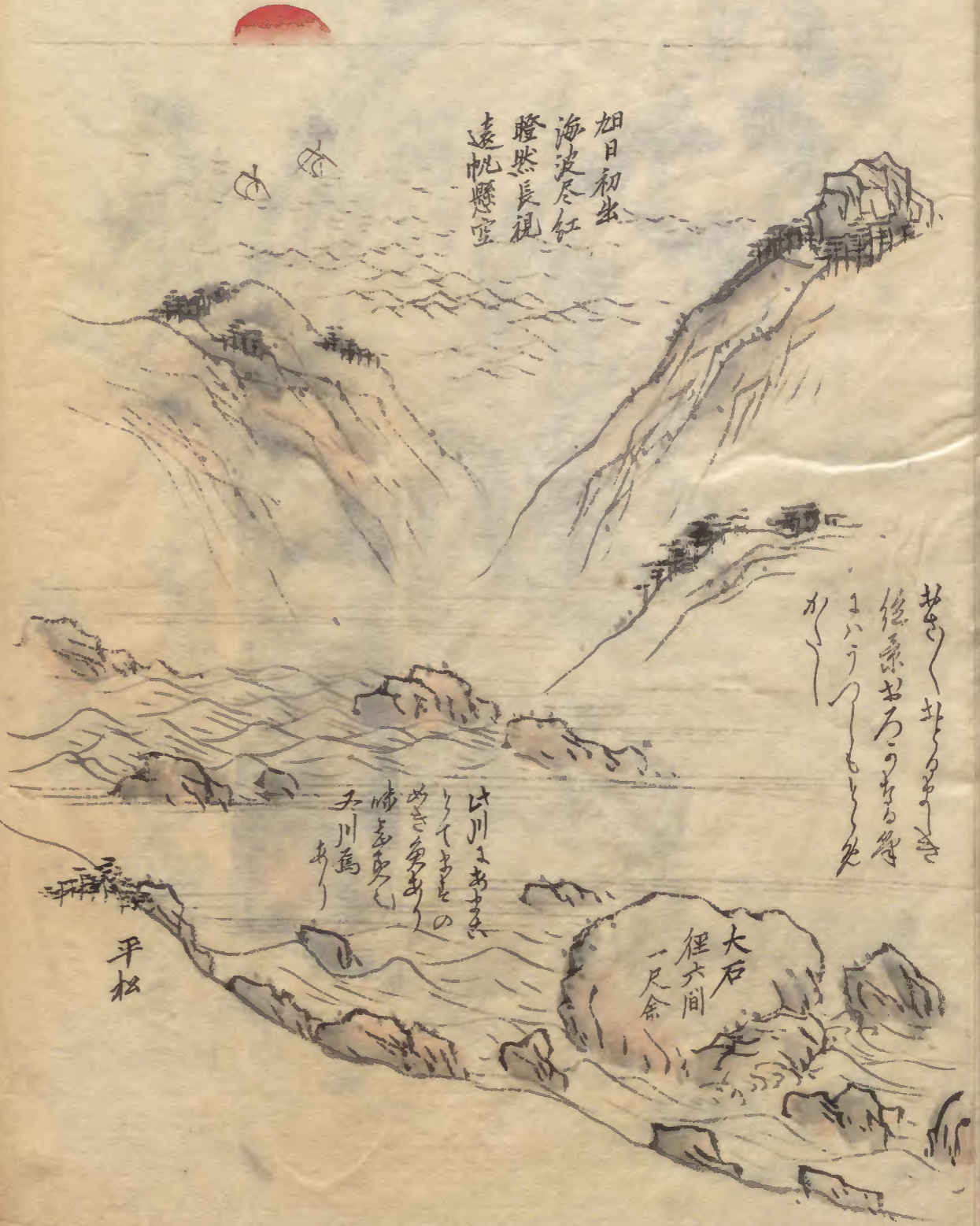
湯山入口圖

湯山入口

菰野をすきく山中の山
水もその水を行りて湯有
り其奇観也

東海

南



旭日初出
海波長紅
瞻然長視
遠帆懸空

昔の昔の昔の昔
徳宗おろしを
か

は川にあま
くてもとの
めきあり
ゆきあり
天川鳥
あり

大石
徑六間
一尺余

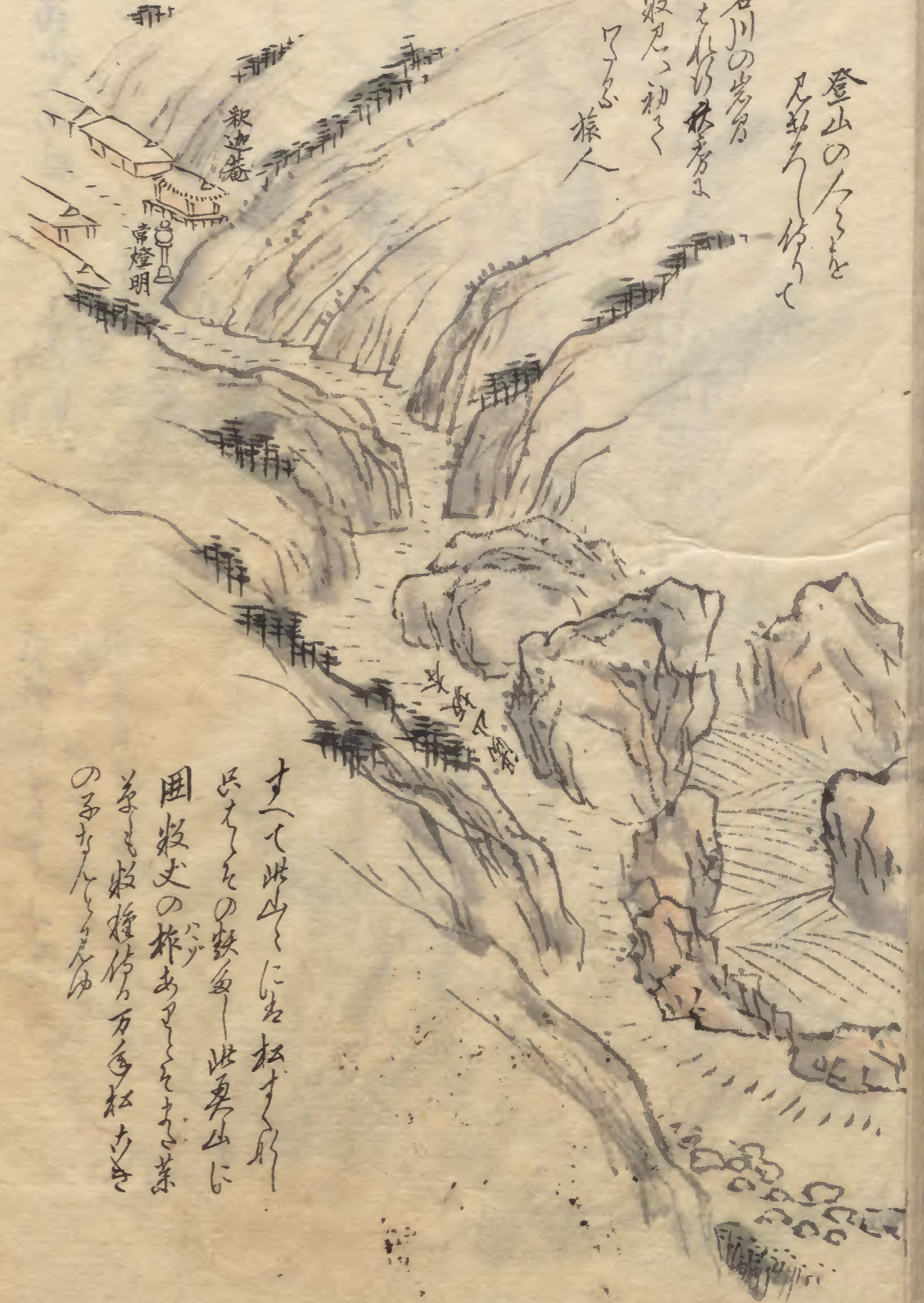
平松

東

登山のつらさを
兄弟ありて作りて

谷川の岩男
とけり林房よ
牧尼の初々

猿人



すて此山に在る松すけり
只その秋多し此山に
困牧丈の株ありてその葉
も牧種作り万多松あり
のちかんとす

此温泉を養老の以沙の淨薫弟沙若遊の靈
告にり神井を尋り得神祠を建てる地
獅を瘞し性を保する水源を測りて
川端の神の
淨薫の今
其後傳交方沙水谷の土地に精舎を營り冠
峰山三岳寺と号し流りて覺信僧於てて任を
し之よりて本尊福徳光女を以て方沙自彫
刻の尊像なり
今其沙水谷の女直
すの尊像なり 星福雲ありて温
泉ありて後古寺廢亡長
意と井
炎塔山 終りて方沙其西を
下卯官を造りて此地を移りて温泉ありて昔小川
せり是より諸人來り浴し瘡を去り病を消す今
の如き東より西より登山してて後湯本

とくわくさきき一極の温泉流く少く向ひて生
塵垢の身を待て溪谷流氷流く風涼く炎暑
の若さを来れり秋の月分り流る鱗山曉眼晴く
華清寺を温まり一浴罷る泉を流る移り冠
嶽の雲白く身を懐ひ寝を傾く望む靑州岸
の巖きく産所岳幾くして常に雲を帯天
公自記實の図を登く三の瀧玉を噴く一簾能
林あり神跡を飛ひ横崖側高窓眼小供り清
風微雨訪情を助くる多戸山左江の詠り霞雲
七子の溪もかくやと是れ東小目を送る海原天
影を掃いて幸をの船帆霧間を流る富士の雪

秋を成る沙板の翠夕送きく尾城樓臺海
川を高く素衣の粉黛水玉をく歩をくつを去
詠物又首を以てまの原の秀也美岸の波光天上
下三山の林を月東西月分り目もいふあ形りり程
かくて古々の人々も吟を共し一他境のあり詠を
多くくく聯嵐倉暉も矢ひ縁糸も所かく詳おの
くくく相を取下たをく袖もく蓋を回く凡と
乃湯人百を以て粉物小玉をく帰るあり去るも
去るも終ふあきゆくくくく台更思きく御侍の
親者もいふまうく後世の世帯も此所を知れ侍り
日教をく下山の侍りく右の侍りに侍り侍り

を今乃に中生して世界を壞るるを去るに奉云
如何に其人を識る事を得んや 答曰ん云大師も
亦是也錢世昭の私
説に見ゆ

實は魔羅亦あらず人勢盛んする時必在
悔をちりて順逆小つて皆是まはるる人又徐
氏のめき直言未だ世小有るく大い

○一行阿闍梨人なりて曰吾古人の相法を以て
凡そ人を相するに古洪範の五福六極を以て主と
其由所を親其由人なりてを察して古賢を以て
其人忠孝仁義行く所依りて言行相成り願
誦造次必善ふ悔する者か 吉人也 亦不忠不孝不義

うて言行不忠不孝願誦造次必善ふ悔する者か
凶人也 吉人者必ず福の積を得凶人者必ず極の刑
を獲るなり於て世にまを必りて其子孫を於て
但風骨氣色の中を於て其前程の体勢を料る
者蓋よく悉く中よりんなりと云 錢氏私説

唯此人一動一靜必善惡の機形なり者輕に
夕に凡そ事の難いありて之を控へ相法の言を
おふを何れ必りて中よりん四民を以て身の便
利を貪る道義ふりては亦き酒色を身を
形し遂に極刑を以て何の福報ありん極刑を
免るれりて骨を矢にせりて其可謂の三

しも方々舞のりとも歌よ。むも只唐土の文に依り
詞をふはのこに按ずるに推畧天皇二十三年七月
七日伊勢外宮法務院の事を以て天棚橋媛命の
名を牽合せしむるは作の和州天川の奥に星の夜
ありて牛女の二星を祀り星の神を新羅前國大
急の天川の急しも二星の神あり。練姫の式より祀
より起りて祠を立りて山やきまを式内神社と
あり其所水の流ま直く白砂廣くして天の根
河も似きる川をいづくも天孫川と依後を形を
姫の名ふりて二星の社を建あり。蓋よ我が國の事
より形後を起せしむる也。

夕ナハ夕の和訓をすてく樓女の稱也。手奈樓姫
の事。一人の名山ありて亦細樓柳樓也。
轉讀せし但カナハ夕といふは公名にあらはし

○程朱を号するを陸王を非と。陸王の号者た彼二子
を濟ふ儒佛の論を以て也。詞章の家より馬の意を以
て。しも馬は一匹の物も有りて自ら号する所の外也
皆要し。公得作とていづくか。公名にあらはし
おあり。一。神を起し。作もめ。公名にあらはし。か。
母板末母報往とて。礼小茂。作ら。少女。凡と。這。辺。少。迷。く
あるも急く非。急。不。向。く。去。る。も。亦。急。き。人。情。以
て。箇。一。義。を。開。て。ハ。勢。す。る。如。火。急。に。歎。喜。し。て。ハ。

御考大方くふくくを信するに耐と少男に
くく懶く志園く速ふ之を去り酒くそはは
くめく前日の言行を悔く大く變改する大
この学者の言希也秋氏の門に入く修め
從ふく速く退きくきおすくは急珠に
才く世の無常に感くてハ志も消くは
く下我身とる縁の業を計り物毎後以の
可修いづの志をくめく業の修め
所謂多權道外者也 極く清く極く
さむく
○張弘靖云天下無事介輩抱兩石弓不知藏一丁
字く是文人の心なり 治世は私を忘るは慎あり

此の才く文學を形くて武を忘る世の私を
さる唐宋明の季を以て凡く一唐の太宗は名を以
く天下を以て統くを精識せりくはくこ
至尊の大度也 唐本紀 韓世忠の克欽の弓を以て
計力強勁なりく統くは張氏の武を介にせり
くはく大際文學者の武佐をきり倭漢
同く世はく身困く世の塵もくはめは
かたに公けりけり時小論は利祿の計を去り
くは國家の用あり

皇
日
天
照
神
代
印

日
出
處
印

内
閣
文
庫
印

